

メラネシア地域における移住の過去と現在

ソロモン諸島マライタ島北部の「海の民」ラウとその人工島居住の事例に即して

里見龍樹(東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻(文化人類学)博士課程)

現代世界を特徴づける事象のひとつとして論じられることの多い移住migrationの問題は、メラネシア地域の研究史において独自の位置を占めている。というのも、1950年代後半以降、親族組織の非単系的な特徴が指摘されてきたこの地域では、そうした特徴によって可能となる集団帰属、居住地の選択・変更やリーダーシップの「柔軟性」や「流動性」の下、西洋世界との接触以前からさまざまな規模・形態の移住が恒常的に行われており、またそうした移住が社会組織にとって構成的な意義をもってきたという議論が多くの論者によって提示されてきたからである。このように、移住についての考察は、今日におけるメラネシアの社会動態を検討するものであると同時に、この地域の親族・社会組織、さらには歴史意識や場所・空間経験に関する研究の伝統を再検討することへとつながる。

移住という問題のこうした射程に取り組みに当たり、本報告では、ソロモン諸島マライタ島北部に居住する「海の民」ラウLauを事例として取り上げる。居住地と生業の違いにもとづき相互を「海の民Asi」と「山の民Tolo」に区別するマライタ島北部の人々の中でも、「海の民」ラウは、サンゴ礁内の浅い海に岩を積み上げて造られる「人工島artificial islands」と呼ばれる特殊な居住形態をもつことで知られる。同島北東沿岸には、無人のものも含めれば今日でも100個近くの人工島が存在するが、居住人口数百人から数人というさまざまな規模をもつそれらの島の多くは、植民地統治やキリスト教宣教がすでに始まった20世紀初頭以降に建設されたものと推定される。

現代のソロモン諸島、とくに同国内でも人口密度の高いマライタ島の人々は、森林伐採など大規模開発の下で多発する土地権をめぐる争いや、急激な人口増と海岸部など一部地域への人口集中による耕地不足への不安、加えて90年代末から2000年代前半にかけて発生した一種の内戦状態などを背景に、村落地域における自らの居住・定住を潜在的に不安定なものとして生きようになっていく。人工島という特殊な居住形態をもつ「海の民」ラウも例外ではなく、そこでは、人々は人工島も含め現在の居住地を放棄し、祖先たちの移住を逆向きにたどって自らの出自集団の「故地 *ae fera*」に「帰る」べきだ、あるいは近い将来にそうすることを余儀なくされるという意識が広く共有されており、過去と未来の移住をめぐるそうした意識の下、人工島という居住形態も新たな意味づけを受けている。

人工島居住民としての「海の民」ラウは、移住という現代的問題に関していくつかの独自の事情をもっている。第一に、ひとつの人工島は、そこで育った男性が、婚姻に際し自らの新居を設置する区画を新たに建造することにより間代代的に増築を繰り返すことを通じて形成され、外部からの移住者が迎え入れられる場合にも同様の増築が行われる上、一度建設された人工島は基本的に消滅しない。その部分を建設する諸個人の営みの集積・堆積という性格をもつ人工島はこのように、個人・集団の移住という出来事や定住の歴史を独自のカタチで物質化しているのである。

第二に、今日では単一の言語・民族集団であるかに見えるラウは、*'ai ni mae*と呼ばれる親族集団の祖先についての伝承が語るように、西洋世界との接触以前にマライタ島のさまざまな地域から移住し人工島を建設して定着した人々の集合として成立したものと考えられ、ひとつの人工島に、現在では異なる言語・民族集団に属するとされる諸地域からの移住者の子孫が共住する事例も見出される。出自集団の「故地」に「戻る」という上記の動向の中で呼び起こされているのはこうした祖先の移住に他ならず、そこでは一面で、「海の民」ラウというアイデンティティ自体の解消が志向されているのである。第三に、ラウの居住地では、1960年代後半から80年代後半にかけ、サイクロン被害を主な契機とし、同時代の社会経済的变化にも影響を受けつつ人工島から本島への移住が進んだ。この帰結として、かつての人工島居住者の多くが、人工島からの移住者であると同時に他地域にあるとされる出自集団の「故地」からの移住者であるという二重の意味での移住者として本島の土地・集落に住まうという現状が生じているのだが、他方90年代以降、一度放棄されて無人化した人工島に人々が再び戻る事例も一部で生じており、人工島をめぐる移住の動態はきわめて複雑である。

こうした状況を踏まえ、本報告では、現代メラネシアの社会動態の中で、マライタ島北部の「海の民」ラウの人々が、移住と人工島の建設・居住をめぐる過去と現在をどのように生きているかを考察し、さらにはそれを通じて、メラネシアに関する研究史のいくつかの側面を再検討することを試みる。

【メラネシア、ソロモン諸島マライタ島、移住、「海の民」ラウ、人工島】